

堰堤少年

防災を夢見た少年

K 予報士



人生の岐路

第一話 はじまり

1. 昔の話

昭和 30 年代（1955～1965 年）の私が子供の頃、日本は貧乏でした。いや、我が家と我が隣人は、当時の尼崎市民の例にもれず、貧乏でしたと言ったべきかもしれません。我が家は兵庫県尼崎市の北東部にある阪急神戸線園田駅が最寄りの住宅地でしたが、テレビも冷蔵庫も家風呂もありませんでした。そこは、名門の阪急東宝グループ阪急不動産が第 2 次世界大戦前に整然と開発した住宅地にもかかわらず、家前の市道は未舗装の砂利道でしたし、地下雨水排水管は整備されていましたが下水は未整備でした。家の隣を流れる建設省直轄一級河川猪名川・藻川の堤防も低くてちやちな時代でして、上流ではよく洪水氾濫がありました。ブルドーザー 1 台ぐらいはあったと記憶しますが、この堤防をトラック運搬とほぼ人力でかさ上げ工事をしている有様でした。川辺には水防用の竹藪がうっそうと茂り、約 100m 対岸には小さな火葬場跡もあるような何か気味が悪い場所と感じましたが、そこは子供の事ですのでトラックのレールが珍しくて、建設作業終了後にそれをどこまでも辿ってよく遊びました。幼稚園や小学校一・二年生の遠足は、延々と続く菜の花畑やレンゲ畑を抜けて上流の河川敷へピクニックに行きました。時には、阪急電車に乗って神戸の六甲山にハイキングに行くのが定番で、そこでも堤防やら砂防堰堤の周りで遊んで溪流に親しみました。このような記憶が、大人になってからも災害防止や砂防技術の勉強と研究に駆り立てたのだと思います。



写真 1 1963 年（8 歳）頃の尼崎市東園田町・藻川堤防上にて、著者（左下）と両親、遙か後方に六甲山地が見える。



写真 2 1988 年頃の砂防堰堤工事現場にて筆者（左・建設省技官時代）

2. 六甲山の堰堤

昭和 40 年代の子供のころの記憶では、神戸の六甲山などで大雨が降り、甚大な土砂災害の被害が生じました。その後の六甲への遠足では、土砂を満杯にためた堰堤を見、先生からこの土砂はその時の大雨で流出したものだと言いました。また、もしその土砂が下流の市街地に流れ出た場合は、戦前の水害のような大変なことになったろうと説明を受けました。将来の夢の一つに堰堤設計が入りました。

この時、長じてからの紆余曲折には思いもよりませんでした。

<続く>

第二話 堰堤との出会い

1. 初めての出会い

小学校から中学校までの春の遠足つまりハイキングは、よく六甲山へ行きましたが、そこで出会ったのが、堰堤でした。その頃は主に御影石を積み上げた「石積み堰堤」なるものによく出くわしました。これらの石積み堰堤は古かったですが、見た目も周辺の森林などと調和して流れ落ちる清流が子供心に遊園地の中の施設のように感じました。

これが、堰堤との初めての出会いで、当初は防災施設とは考えていなくて、人工の滝の様で印象深いものでした。これが原因で私は砂防技術あるいは治山技術を目指しました。ことの良し悪しはともかく、工業都市で（1970年初期頃までは）酷い公害の町であった汚れた尼崎市の住人だった私は、溪流にある人工の清流の滝＝石積み堰堤にアこがれてしまったわけです。

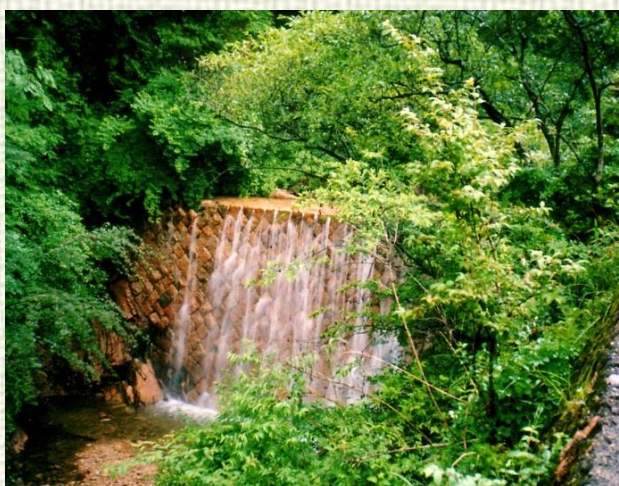


写真3 1994年神戸市内の六甲山で撮影した石積砂防堰堤（戦前に建設のもの）



写真4 2016年熊本県阿蘇山で撮影した最近の砂防堰堤（鋼製スリット型）

<続く予定>